

実践報告

地域と連携した総合型地域スポーツクラブにおける学生参加型プログラム構築の取り組み  
— みはまスポーツクラブを例として —

高村 秀史

日本福祉大学 全学教育センター

松井 健

日本福祉大学 経済学部

伊藤 僚

日本福祉大学 全学教育センター

University and Community Cooperation in Forming  
a Student Program at a Community Sports Club  
- Using Mihama Sports Club as a Model -

Shuushi TAKAMURA

Learning Advisor, University Educational Center, Nihon Fukushi University

Takeshi MATSUI

Faculty of Economics, Nihon Fukushi University

Ryo ITO

University Educational Center, Nihon Fukushi University

Keywords : 総合型地域スポーツクラブ, 地域連携, スポーツ振興, アジリティ, 学生参加型プログラム

Summary:

On September 23rd, 2012, Nihon Fukushi University, in collaboration with the local town of Mihama, opened the Mihama Sports Club. Planning for the sports club began in 2008, and, through coordination with the preparatory committee, preliminary operations and program planning began in 2010. The insight gained from these preliminary initiatives led to the creation of a student program, which was designed to fulfill the club's mission of strengthening the relationship between students and the local community and deepening students' learning. As a result, when the club opened in September, recreational classes were added to give university students a chance to mentor elementary school students and toddlers. This report focuses on the knowledge gained through the program development process and preliminary operations, and, in doing so, considers the significance and role of student participation in community sports clubs.

Keywords : Community sports club, Community Cooperation, Promotion of sports, Agility, Student Program

## 要約

2012年9月23日に、日本福祉大学（以下本学）と大学所在地である美浜町との連携による総合型地域スポーツクラブ「みはまスポーツクラブ」が開設された。クラブ開設の検討は2008年度より開始され、検討会・準備委員会を経て2010年度よりプレ事業を行い、プログラム策定のための実践と検討を行ってきた。プレ事業の取り組みから得られた知見に加え、「学生と地域とのふれあい」「学生の学びを深める」ことを中心とした学生の能力向上をミッションとし、学生参加型プログラム構築の取り組みが行われた。この結果、2012年9月のクラブ開設時には、学生が指導者として参加する小学生レクリエーション教室・ちびっこアジリティ教室がプログラムに加えられた。本稿では、プログラム策定の経緯とプレ事業から得られた知見の報告を中心に、学生が総合型地域スポーツクラブに参画する意義とについて考察を行う。

### はじめに

文部科学省は、スポーツ振興法の規定に基づく、スポーツ振興の基本的な方向性を示すため、2000年9月に「スポーツ振興基本計画」を策定した。この計画策定から5年が経過したことに伴い、2006年9月に中央教育審議会スポーツ、青少年分科会の意見を踏まえて計画の改訂が行われた（文部科学省、2006）。スポーツ振興基本計画では、生涯スポーツ社会の実現に向けた、地域におけるスポーツ環境の整備充実方策として、「国民の誰もが、それぞれの体力や年齢、技術、興味、目的に応じて、いつでも、どこでも、いつまでもスポーツに親しむことができる生涯スポーツ社会を実現する」ことを目標としている。こうした考え方は、2011年に法律が全改正され、「スポーツ基本法」となり、「スポーツ基本計画」となっても踏襲された。同計画の基本方針として「年齢や性別、障害等を問わず、広く人々が、関心、適性に応じてスポーツに参画することができるスポーツ環境を整備すること」が謳われている。「総合型地域スポーツクラブの育成・推進」は、旧い振興計画と新しい基本計画の両方にわたって、地域におけるスポーツ環境の整備充実方策として重視されている（文部科学省、2006。文部科学省、2012A）。

これまで、わが国のスポーツは、学校と企業を中心に発展してきた。特に学校の体育授業では、多くの運動・

スポーツの機会が提供される。このため、学校を卒業するとスポーツに親しむ機会が減少する傾向がある。この傾向を改善するためには、身近な中学校区程度の生活圏・コミュニティの中に地域の実情に応じた「誰もが、性別、年齢、障がいの有無にかかわらず」参加できるスポーツクラブを育成し、定着させることが理想である。その実際例として、総合型地域スポーツクラブは学校の体育施設や公共のスポーツ施設を拠点とし、住民の誰もが参加できる、複数種目のプログラムを展開している。また、地域住民が主体的に運営することを基本形態としている。

2012年7月時点で、総合型地域スポーツクラブは、創設準備中を合わせて全国で3,396クラブある（文部科学省、2012B）。日本福祉大学（以下本学）の所在地である愛知県知多半島を構成する5市5町でも、創設準備中であったみはまスポーツクラブを含め、14のクラブが活動を行い、地域のスポーツ振興に寄与している（愛知県スポーツ振興審議会、2011）。

総合型地域スポーツクラブは地域住民の主体的運営で、複数種目が展開されることが望まれるが、中には企業が中心となって運営されている場合や、単種目のみを取り扱う場合など、その形態は多種多様である。本稿では、将来的に地域住民主導の運営を目指し、大学と自治体が協働で総合型地域スポーツクラブの育成・推進に取り組んだ事例を報告する。

名古屋などの大都市部と異なり、地方では企業によるスポーツ振興（スポーツクラブ運営など）は稀であり、スポーツ振興は自治体（行政）が中心となって担っている。一方、メディア情報量の増加によって住民のスポーツニーズは多様化している現状がある。また、年齢構成や地域性によってもニーズは異なる。自治体が運営する場合、こうしたニーズに応じた複数の種目が準備されていることが重要である。また、地域住民が参加しやすいこと、既存のスポーツ団体と重複しないプログラム構成であることが求められる。したがって、総合型地域スポーツクラブでは、地域の実情に応じて新しいアイデアを取り入れつつ、他団体との連携を深めながら組織やプログラムを構成することが必要である。

本報告では、総合型地域スポーツクラブに求められるこれらの要件を踏まえながら、クラブの基礎作りを自治体と本学が協働して行った、みはまスポーツクラブの事例に焦点をあてて考察を行う。特に、地域のスポーツニーズ調査やクラブ設立前のプレ事業から得られた知見をも

とに、総合型地域スポーツクラブに学生が参加する意義と役割について考察する。また、プログラム策定の経緯を例にあげながら、どのようにプログラムを立案・実行すべきかを具体的に提案する。

### みはまスポーツクラブ設立までの取り組み

みはまスポーツクラブの設立までには様々な取り組みが行われた(表1)。以下では特にプログラム策定に関連する取り組みの詳細と考察を報告する。

#### 1. 総合型地域スポーツクラブ検討会の開催<sup>表11</sup>

文部科学省は到達目標として、2010年度までに全国の各市町村において少なくとも1つは総合型地域スポーツクラブを育成する目標を立てた(文部科学省, 2006)。本学でも、大学を基盤とした総合型地域スポーツクラブの検討を2008年のスポーツ教育センター設置とともに開始した(日本福祉大学スポーツ教育センターHP)。同センターは、クラブをはじめスポーツに関する諸施策を立案し、事業を推進することを目的とした組織であり、スポーツに関する学生教育や、地域と連携した教育実践活動などを主管する役割を担っている。また、大学の特色を生かした、学内外での総合的なスポーツ振興の担い手となっている。

2009年に、大学のクラブ検討の動きを知った美浜町体育指導委員(2012年にスポーツ推進委員に名称変更)ならびに町職員が加わり、総合型地域スポーツクラブの設立の検討が始まった。連携した設立の可能性を探る総合型地域スポーツクラブ検討会(以下検討会)を毎月開催し、約1年間検討を重ねた。検討会では、美浜町内におけるスポーツ振興の現状分析を踏まえ、総合型地域スポーツクラブのあり方を確認するため、学習会の開催や先進事例の調査が行われた。2010年7月に設立準備委員会が正式に発足し、美浜町と本学が連携してクラブを設立することが確認された<sup>表12</sup>。

#### 2. スポーツ関連既存団体との連携:

大都市圏と異なる地方での総合型地域スポーツクラブの育成には既存団体との連携が不可欠である。総合型地域スポーツクラブでのプログラム策定においては、地域の現状を知り、既存団体と重複させない必要があるからである。現状を確認せずに、単に提供側の人的資源などの都合でプログラムを策定した場合、プログラム重複か

ら参加者の分散や取り合いになることが考えられる。そこで検討会では、本学からはスポーツ教育センター構成員、美浜町からは自治体のスポーツ振興の要となる体育指導委員(現スポーツ推進委員)と体育協会役員、美浜町のスポーツ活動を統括する教育委員会社会教育課職員が参加した。各団体が持っている人的資源や物的資源、プログラム内容等の意見交換を行い、プログラム策定の具体化を図った。

#### 3. 町民のスポーツ意識調査

地域に根差したスポーツクラブの設立を考えた場合、地域のニーズを理解・考慮したうえで計画を進めることが必須である。本取り組みにおいてもクラブ設立に資するため、2009年度にアンケートによる町民のスポーツ意識調査が行われた<sup>表13</sup>。スポーツ振興基本計画では「成人の週1回以上のスポーツ実施率を50パーセントとすること」とあるが、アンケートの結果より、美浜町のスポーツ実施率は全体34.8%、男性37.3%、女性33.2%であることが判明した。その他にも、スポーツをするきっかけや機会がないためにスポーツをしていない町民が24.1%も存在していること、町民の健康に対する意識は高いことなど、美浜町の実態が示された(日本福祉大学スポーツ教育センター・美浜町教育委員会社会教育課社会体育係, 2010)。

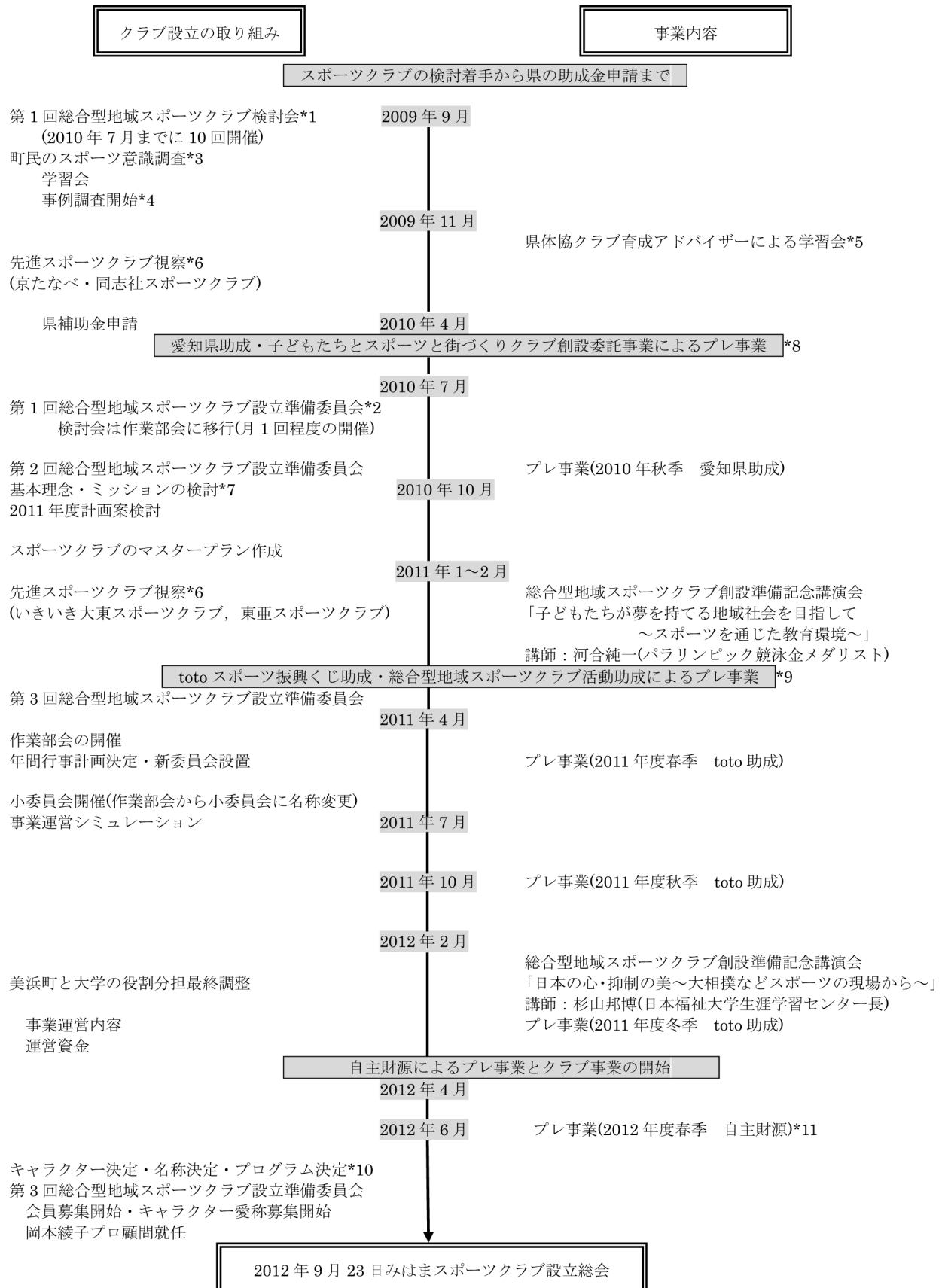
#### 4. 学習会の開催・事例調査<sup>表14</sup>

総合型地域スポーツクラブの理解を深めるため、総合型地域スポーツクラブ連絡協議会の研修会への参加や愛知県体育協会クラブ育成アドバイザーを招いての学習会が開催された<sup>表15</sup>。また、自治体や地域と大学が連携して運営する先進クラブとして、京たなべ・同志社スポーツクラブ(京都府)、東亜スポーツクラブ(山口県)、いきいき大東スポーツクラブ(大阪府)の視察が行われた<sup>表16</sup>。これらの取り組みによって得られた知見は、報告会やグループワーク等での振り返りや学習のベースとなり、総合型スポーツクラブ設立に際し、多いに有益であった。

#### 5. クラブの基本理念とミッションの検討

2010年には、第2回総合型地域スポーツクラブ設立準備委員会(以下準備委員会)が開催され、スポーツクラブの基本理念とミッションの検討が行われた<sup>表17</sup>。ス

表1. みはまスポーツクラブ年表



スポーツクラブは、町や地域と大学の協働事業であり、地域連携を具体化する場となる。町と大学が連携することの意義に加えて、学生がクラブに参加する意義などが確認された。竹田は、「地域連携とは、単なるボランティアを行ったり、大学施設を開放することではない。地域と連携することにより、大学にとって教育というメリットが必要である」と述べている（竹田，2009）。我々のクラブの基本理念とミッションにおいても、「美浜町との地域連携・協働」の上に子どもたちと学生の「学びと成長」を支援することを掲げた。みはまスポーツクラブにおいて、学生が積極的に関与できるプログラムを構築することが大学として重要なミッションとなる。

表2. 美浜町と日本福祉大学の協働による総合型地域スポーツクラブ 基本理念とミッション

**基本理念：**

大学と町が協働で、さまざまなスポーツ・文化活動を通じて、子どもから大人まで、地域の人たちと学生がふれあえる、明るく活気あるまちづくりを目指します

**ミッション**

- ・町民の健全な心身の保持増進を支援します
- ・子どもたちと学生の学びと成長を支援します
- ・美浜町と日本福祉大学が連携、協働したスポーツコミュニティを創ります

## 6. プレ事業ならびにクラブ運営費

クラブの運営費は、プログラムや講師料等のプログラムの質と量に大きくかかわる問題である。2010年と2011年のプレ事業の開催は、愛知県の「子どもたちとスポーツと街づくりクラブ創設委託事業」の助成金（2010年度）表1\*8、独立行政法人日本スポーツ振興センターのスポーツ振興くじ助成（2011年度）表1\*9を利用して行われた。2012年度からは町と大学から一定額を拠出し、「任意団体」として独立した運営を行っている。

## 7. 広報活動

質の高いプログラムを策定しても、認知度が低ければ参加者が少なくなり運営に影響を及ぼす。また、地域に根差したスポーツクラブを運営するには地域の人材を発掘する必要がある。そこで地域住民に対するクラブの存在・活動の認知、地域の指導者の発掘のために広報活動が行われた。初期のプレ事業での広報媒体は美浜町の広報誌である「広報みはま」と、学校・公民館・町施設などへのポスター掲示とチラシ配布が中心であった。その後、美浜町ホームページ、日本福祉大学ホームページ、



みはまスポーツクラブ

図1. みはまスポーツクラブロゴマーク

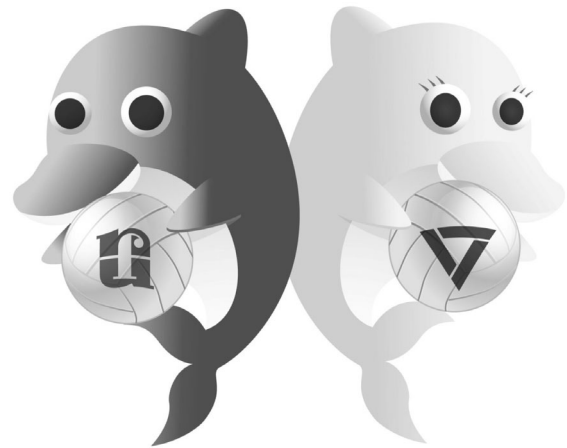


図2. みはまスポーツクラブキャラクター  
(左からスポ君、ルカちゃん)

Facebook, Twitter, メーリングリスト等の ICT を利用した媒体を加え、広報活動を行っている。

昨今、多くの団体に「ゆるキャラ」が存在し、広報活動に一役買っている。本スポーツクラブにも親しみやすいキャラクターやロゴマークが必要と考え、美浜町出身のデザイナーの協力を得てこれらを作成した。キャラクターは一般公募による愛称募集が行われ、スポーツとカルチャーにちなんだ「スポ君」と「ルカちゃん」と名付けられた（図1、図2）<sup>表1\*10</sup>。

## ・プログラム策定

みはまスポーツクラブのプログラム策定のためのプレ事業は、2010年度秋季・冬季、2011年度Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期、2012年度春季に開催された（表3-1）。2012年9月の開設時プログラムは、プレ事業から得られた知見に加え、運営資金・地域性・教育的配慮等を考慮し決定された（表3-2）。



表 3-1. みはまスポーツクラブ創設前プレ事業プログラムの推移

2010 年度秋季（愛知県助成）

種 目	内 容
よさこい教室 (10月・4回 + 11月大学祭での演舞)	“ 南中ソーランの稽古を通じて友達を作り大学祭で大学生と一緒に演舞 ” 対象：小学4年生以上中学3年生以下 指導：大学生（よさこい演舞サークル 夢人党） 施設：美浜町総合公園体育館、日本福祉大学
わいわいスポーツ教室 (10～11月・4回)	“ 障がい者スポーツのひとつ、車いすバスケットボールを体験する ” 対象：町内在住の小・中学生（親子参加可） 指導：車いすバスケットボール選手・大学生（アミューズ：障がい者スポーツの実践・普及を目指すサークル） 施設：日本福祉大学
スナッグゴルフ教室 (10～11月・4回)	“ 気軽に楽しめるスナッグゴルフを通じて、ゴルフの基礎を学ぶ ” 対象：町内在住の小学生 指導：美浜町職員 施設：新南愛知カントリークラブ（美浜町内施設の協力）
シェイプアップ 水中運動教室 (11～12月・4回)	“ 水中運動とバランスのとれた食事で、健康な身体を獲得しよう ” 対象：町内在住、在勤者 指導：外部講師 施設：NFU スポーツドーム（日本福祉大学関連施設）

2010 年度冬季プレ事業（愛知県助成）

種 目	内 容
ミニテニス教室 (2月・3回)	“ テニスラケットを小さくしたものとビニール製のボールを使い、バドミントンコートでプレイする新しいスポーツ ” 対象：町内在住の小学4年生以上（親子参加可） 指導：美浜町体育指導委員 施設：美浜町総合公園体育館
ラクロス教室 (2月・4回)	“ ラクロスは、二つのチームに分かれて、棒に網がついた道具で、ボールを投げたり、受けたり、運んだりして相手ゴールに入れるスポーツ ” 対象：町内在住の小学4年生以上中学3年生以下（親子参加可） 指導：日本福祉大学生 公認サークル「女子ラクロス部」 施設：日本福祉大学グラウンド

2011 年度 期プレ事業（スポーツ振興くじ助成）

種 目	内 容
ヨガ教室 (6～7月・4回)	“ ルーシーダットン（タイ古式）ヨガで健康作り ” 対象：町内在住の中学生以上 指導：外部講師 施設：美浜町総合公園体育館、日本福祉大学
シェイプアップ 水中運動教室 (6～7月・4回)	“ 水中運動で、健康な身体を獲得しよう ” 対象：町内在住者、在勤者 指導：外部講師 施設：nfu スポーツドーム（日本福祉大学関連施設）

2011 年度 期プレ事業（スポーツ振興くじ助成）

種 目	内 容
よさこい教室 (10～11月・4回 + 11月大学祭での演舞)	“ 南中ソーランの稽古を通じて友達を作り大学祭で大学生と一緒に演舞 ” 対象：町内在住の小学4年生以上中学3年生以下 指導：大学生（よさこい演舞サークル 夢人党） 施設：美浜町総合公園体育館、日本福祉大学
車いすで遊ぼう！！ (11/29・1回)	“ 障がい者スポーツのひとつ、車いすバスケットボールを体験する ” 対象：町内在住の小・中学生（親子参加可） 指導：大学教員・車いすバスケットボール選手 施設：日本福祉大学

スナッグゴルフ教室 (10月・4回)	“ 気軽に楽しめるスナッグゴルフを通じて、ゴルフの基礎を学ぶ ” 対象：町内在住の小学生 指導：美浜町職員 施設：新南愛知カントリークラブ (美浜町内施設の協力)
シェイプアップ 水中運動教室 (11～12月・4回)	“ 水中運動で、健康な身体を獲得しよう ” 対象：町内在住、在勤者 指導：外部講師 施設：nfu スポーツドーム (日本福祉大学関連施設)
ウォーキング教室 (10～11月・4回)	“ ウォーキングの正しい知識と方法を学びながら健康な身体を獲得する ” 対象：40歳以上 (夫婦での参加大歓迎！) 指導：外部講師 施設：美浜町総合公園体育館

## 2011年度 期プレ事業 (スポーツ振興くじ助成)

種 目	内 容
ミニテニス教室 (2月・4回)	“ 誰でも気軽に楽しめるミニテニスをしよう！ ” 対象：町内在住者 指導：体育指導員 施設：美浜町総合公園体育館
ラクロス教室 (2～3月・4回)	“ ラクロスを体験してみよう！！ ” 対象：町内在住の小・中学生 指導：大学生 (ラクロス部) 施設：日本福祉大学
ヨガ教室 (3月・4回)	“ ルーシーダットン (タイ古式) ヨガで健康作り ” 対象：町内在住の中学生以上 指導：外部講師 施設：美浜町総合公園体育館

## 2012年度春季プレ事業 (自主財源)

種 目	内 容
ちびっこアジリティ 教室体験 (6月・1回)	“ 子どもの敏捷性を高めるトレーニング法の指導 ” 対象：未就学児童 (年中・年長児童) 指導：大学教員・学生 (アメリカンフットボール部) 施設：美浜町総合公園体育館
小学生アジリティ 教室体験 (7月・1回)	“ 小学生の敏捷性を高めるトレーニング法の指導 ” 対象：小学1年～3年生 指導：大学教員・学生 (アメリカンフットボール部) 施設：美浜町総合公園体育館
ノルディック ウォーキング教室 (6月・4回)	“ ノルディックウォーキングの正しい知識と方法を学びながら健康な身体を獲得する ” 対象：中高年 指導：外部講師 施設：美浜町総合公園体育館
ちびっこ海の 事故防止教室 (7月・1回)	“ 着衣泳の体験等海での事故を防止する知識と体験 ” 対象：小学生 指導：大学教員・学生 (ライフセービング部) 施設：nfu スポーツドーム (日本福祉大学関連施設)

## 1. プレ事業プログラムの設定

内容や講師が異なるさまざまな種目を試験的にを行い、クラブのプログラムを策定するプロセスとなるのがプレ事業である。2010年度秋季に行われた最初のプレ事業プログラムの設定では、できる限り運営に参加する大学・町の資源を利用することが考慮された。この結果、本学

からは「よさこい教室」(よさこい踊りサークル、夢人党が担当)と「わいわいスポーツ教室」(障がい者スポーツサークル、アミューズ担当による車いすバスケットボール体験)、美浜町からは「スナッグゴルフ教室」(町職員指導)を準備した。町民のニーズが高く、外部指導者が必要な教室も企画した。例えば大学関連施設である

表 3-2. みはまスポーツクラブ開設時プログラム

2012 年度開設時プログラム (自主財源)

種 目	内 容
ちびっこアジリティ教室 (10~3月・6回)	“ 子どもの敏捷性を高めるトレーニング法の指導 ” 対象：未就学児童 (年中・年長児童) 指導：大学教員・学生 (アメリカンフットボール部) 施設：美浜町総合公園体育館
小学生 レクリエーション教室 (10~12月・10回)	“ 小学生にオムニバスで様々なスポーツを体験させる ” 対象：小学1年~3年生 指導：大学教員・学生 (ラクロス部・アメリカンフットボール部・夢人党) 施設：美浜町総合公園体育館
ノルディック ウォーキング教室 (10月・2回)	“ ノルディックウォーキングの正しい知識と方法を学びながら健康な身体を獲得する ” 対象：中高年 指導：外部講師 施設：美浜町総合公園体育館
スナッグゴルフ教室 (10~11月・4回)	“ 気軽に楽しめるスナッグゴルフを通じて、ゴルフの基礎を学ぶ ” 対象：町内在住の小学生 指導：中村修プロ (日本プロゴルフ協会所属) 施設：新南愛知カントリークラブ 美浜コース (美浜町内施設の協力)
スナッグゴルフサークル (12月・3回)	“ スナッグゴルフを継続して活動し、教室で得た技術の向上を図る。また、試合出場やゴルフ接続に向けて意識を高める ” 対象：町内在住の小学生 指導：中村修プロ (日本プロゴルフ協会所属) 施設：新南愛知カントリークラブ 美浜コース (美浜町内施設の協力)
ミニテニス教室 (2月・4回)	“ 誰でも気軽に楽しめるミニテニスをしよう！ ” 対象：町内在住者 指導：スポーツ推進委員 施設：美浜町総合公園体育館
ポッチャ de 健康サークル (9~3月・約20回)	“ ポッチャを実践して健康の維持増進を目指す ” 対象：高齢者 指導：大学教員・学生 (スポーツアシストサークル) 施設：日本福祉大学体育館
子どもとスポーツお話し (3月・1回)	“ 日本福祉大学教員による子どもとスポーツに関する保護者向け講演 ” 「知っておきたい乳幼児期の発達~運動発達・認識発達・ことばの発達を題材に~」 講演者：山本秀人 (日本福祉大学 子ども発達学部教授) 対 象：保護者 指 導：大学教員・学生 (アメリカンフットボール部) 施 設：美浜町総合公園体育館

nfu スポーツドーム温水プールを利用した「シェイプアップ水中運動教室」を準備した。同年冬期には「ミニテニス教室」(体育指導委員担当)と「ラクロス教室」(女子ラクロス部が担当)を準備した。2011年のプレ事業においても同様な教室を準備し、併せて町民ニーズの高い「ヨガ教室」(外部指導者)と「ウォーキング教室」(外部指導者)を準備した。これらの事業(教室)を、担当者変更や同系種目への変更を加えながら、開設時プログラムに継承した。

2012年には、大学生の人的資源を活かす手段として「ちびっこアジリティ教室体験」「小学生アジリティ教室体験」(大学教員とアメリカンフットボール部、女子ラクロス部が担当)を企画し、試験的に開催した。さらに、

中高年者向けの新たなプログラムとして「ノルディックウォーキング教室」(スポーツ推進委員担当)、「ポッチャ de 健康サークル」(大学教員、スポーツアシストサークル担当)を加え、ニーズや体力レベルに応じて選択できるようにした。水中運動教室については、費用や会場アクセスの問題から、当面見送ることとした。

## 2. 対象の設定

総合型地域スポーツクラブには(1)子どもから高齢者まで(多世代)、(2)様々なスポーツを愛好する人々が(多種目)、(3)初心者からトップレベルまでそれぞれの志向・レベルに合わせて参加できる(多志向)という特徴がある。しかし、3つの特徴すべてを具備するよ



うなプログラムの設定は困難であるため、クラブが主としてプログラムを行う対象を設定する必要があった。ターゲットとなる世代として、事前調査や地域住民の声から「高齢者・子ども」が適当と推察された。種目の設定には地域のニーズを考慮するとともに、既存のスポーツ団体と競合しないことが必要である。美浜町はスポーツ少年団等のスポーツ活動が盛んであることから、特に人気が高い野球やサッカー等を除いた種目設定が考慮された。高齢者へは負荷が少なく長期的に続けられる健康づくりをテーマに種目の設定が行われた。志向に関しては開催当初からトップレベルの競技者を集めることは考えられない。このため、初中級者を対象と捉えた。将来的には、障害者スポーツ指導員資格を有する本学の学生人材を活かし、障がい者が気軽に参加できるスポーツ（アダプテッドスポーツ）の展開を充実させることを模索している。

### 3. クラブ財源に対する考慮

2011年度までは財源として県助成金やスポーツ振興くじの助成を受けながらの事業展開が行われた。助成金はクラブの基礎を構築するためには不可欠であったが、助成金の申請・報告に関わる書類等の作成は大変な作業であった。クラブに専従のクラブマネージャー・事務職が不在の中での書類作成作業は、協働型クラブの運営に支障をきたす可能性がある。このため2012年度から助成金に頼らず、町と大学の財源を利用した運営を行うこととした。また、みはまスポーツクラブは、参加費等を自主運営が可能な範囲に抑えることが確認されている。拠出金をベースとして、赤字にならない身の丈に合った運営が求められている。そのためできる限り大学と町の人的資産を利用したプログラム策定が必要となる。

### 4. 学生参加と学びを考慮したプログラム

本学の特性によるところも大きいと推察されるが、本学の学生はボランティアや地域貢献に積極的に参加する傾向がある。現在、プログラム運営に貢献している学生も、金銭的には必要最低限の経費を受け取るのみであり、いわゆるアルバイトのような収入を得ることはない。大学が地域貢献に参加するメリットに関しては前述したが、学生にとってスポーツクラブへ参加することによって得られる最大の成果は学びである。参加の場面で学生は、子どもや高齢者の指導を行ったり、交流する場を提供される。指導の場では指導の方法や、難しさ・喜びなどを

実体験として学ぶことができる（竹田，2009）。また、交流の場面においても、今後の進路に活かすことのできるコミュニケーション力を磨くことができるであろう。こうした学びが学生の継続的な行動のインセンティブとなる。

学生の参加は多くの場合サークル単位で行われる。サークルで地域貢献をすることにより、所属するサークルに対する誇りを持つ機会となる。また、スポーツクラブに参加する地域住民にとって、学生は個人ではなく「アメフト部のお兄さん」「ラクロス部のお姉さん」として捉えられる。指導内容・方法がよく、印象的であればサークルのファンになってくれる可能性もある。学生スポーツは一部を除いて観客や運営に苦勞している場合が多いので、認知度が上がり、ファンが増加することも大きなメリットである。このようにスポーツクラブに参加することで学生が受ける恩恵は大きく、多様である。以上のことから、学生に学びの場を提供できるプログラムを構築することが重要である。また、プレ事業の段階では、準備されたメニューを行う参加にとどまっているが、将来的には学生が主体的かつ継続的にスポーツクラブに参画することが望まれる。

## 学生参加プログラムの構築と実践

### 1. ちびっこアジリティ教室と小学生レクリエーション教室の概要

昨今、子どもの運動不足や運動不得手、肥満対策のための運動教室が全国で展開されている。同時に体育の家庭教師の存在がクローズアップされるようになった（スポーツ健康産業団体連合会，2008）。美浜町の実態を知るため、プレ事業のミニテニス教室・ラクロス教室・よさこい教室において、口頭や書面アンケートによる実態調査を行った。対象は、未就学児および小学生の保護者であり、延べ30名から回答が得られた。主に口頭と自由記述より、美浜町には子どもの基礎的な運動能力を養成する教室が存在しないことが示唆された。このため、近隣の半田市や武豊町、中には名古屋市まで子どもをかわせている保護者がいるという情報を得た。

幼児期に顕著な発達が見られる神経系は、およそ6歳ごろまでに成人のほぼ90%に達する。このことはスカモン（Scammon）の発育曲線で広く知られている（中野，2001）。したがって、神経系が関与する運動能力を未就学の時期に鍛えることが重要となる。例えば、文部

科学省は3・4歳で「体のバランスをとる動き」と「体を移動する動き」を身につけさせ、4・5歳でさらに「用具などを操作する動き」を加え、5・6歳でこれら3つの動きを洗練化する、という流れを示し、その具体的な方法を幼児期運動指針ガイドブックで例示している(文部科学省 幼児期運動指針策定委員会, 2012)。そこで、これら3つの動きの洗練化を図るため、4, 5歳の未就学児を対象にした「アジリティ教室」を企画した。アジリティ(敏捷性)トレーニングを選択した理由は、単一種目を固定して行い、能力成長の幅を狭めるのではなく、該当年齢の子どもが今後出会うであろう様々なスポーツに対応する基礎となる運動能力を高めるためである。

本学ではスピード&アジリティ&クイックネストレーニング(SAQトレーニング)や動作を構成する基本的動作を学ぶムーブメントトレーニングに取り組んでいるスポーツサークルが少数ながら存在する。アジリティ教室の指導を担当するアメリカンフットボール部もその一つである。指導を行う学生からみた場合、普段から行っているトレーニングを子どもに指導することで自らの理解度を高められることが期待できる。また、基礎的な運動能力を持った子どもが将来、町の既存スポーツ団体に所属していくことは、地域のスポーツ振興や競技力向上にも貢献できる。

以上を勘案しプログラムを計画し、2012年度春季に開催したプレ事業において、「ちびっこアジリティ教室体験」開催した。併せて小学生でも「小学生アジリティ教室体験」を行い、子どもや保護者の反応、学生の対応の様子等を確認した<sup>※11)</sup>。体験終了後、参加した子どもや保護者に対してアンケートや口頭質問をおこない、延べ30名から回答を得た。この結果、学生が参加することに対する子ども・保護者の反応は良好であった。アンケートの結果を「4. プレ事業での評価」に示す。

アンケートより、スポーツ少年団や小学校の部活動は4年生から始まるため、小学校1~3年生がスポーツを行う場が少ないという情報も得た。そこで、未就学児では「ちびっこアジリティ教室」を行い、小学校低学年児童に対しては「小学生レクリエーション教室」を企画した。内容は学生サークルが3回を1セットとして担当し、様々なスポーツ体験プログラムを提供することである。2012年度の開設初年度は、プレ事業において指導実績があるアメリカンフットボール部、女子ラクロス部、夢人党の3サークルがオムニバス形式で指導を行い、多種

目のスポーツ体験プログラムを提供した。日本のスポーツ現場では、種目選択の自由度が少なく、未就学期や小学校期から同じ種目を継続することが多い。種目の選択に関しても、子ども本人の選択よりも、小さい時に保護者が競技種目を選択し、その種目を長期間にわたって行う傾向が強い。アメリカでは学校教育カリキュラムの中に多岐にわたる種目が設定され実践されているが、様々な種目を体験し各自にあった種目を選択することはスポーツに対する肯定的感情につながることを示唆されている(久湊と尾崎, 1996)。

プレ事業の様子から、初めから学生に子どもの指導をすべて委ねることは困難なことも確認された。本開催では教員による指導を受けながら指導実践を行い、学びを後輩や他サークルにフィードバックしていくことを計画した。

## 2. プレ事業での指導内容と事前説明

各プレ事業での開催、体験を主な目的とするため、開催は1回だけとした。多くの内容を行うことはできないため、代表的なSAQトレーニングである「ラグドトレーニング」の指導と、展開として「フラッグ遊び」を中心に行った。アジリティトレーニングの意味や意義を説明するため、保護者には指導前にプリントを配布し、事前説明を行った(図3)。参加した子どもには内容説明は行わず、楽しんでもらうことを心がけた。

## 3. プレ事業における学生スタッフの育成

プレ事業の2つのアジリティ教室への参加対象者は、未就学児および小学校低学年児童である。アジリティ教室は、指導経験を持つ講師1名以外は、学生スタッフによる指導やサポートが行われた。理想的なスポーツ環境の提供や地域との交流を行うためには、運営スタッフである学生が果たす役割が大きく、子どもの運動指導経験の少ない学生が、いかに体験・学習を積んでいくかが重要な課題である。そこで学生に対する指導を併せて計画した。各プレ事業では学生スタッフに対して、教室の開催前に指導の注意点やプログラム詳細について指導した。事前指導の内容を表4に示す。

教室終了後には振り返り学習を行った。振り返り学習では、保護者からのアンケート結果や、担当教員の感想や指導、事例をもとに、学生と教員で「子どもの指導」をテーマにディスカッションを行った。その結果、本開

# 2012年9月開設 みはまスポーツクラブ フル事業 アジリティ教室に参加の 保護者のみなさま



はじめまして♪本日アジリティ教室の講師を務めます、日本福祉大学のたかむらです<(\_)\_>  
今回の体験では、日本福祉大学アメリカンフットボール部のお兄さんと、ラクロス部のお姉さんが  
お手伝いをしてくれます。遊び感覚で楽しく進めたいとおもいますので、よろしくおねがいいたします♪

## アジリティってなに??

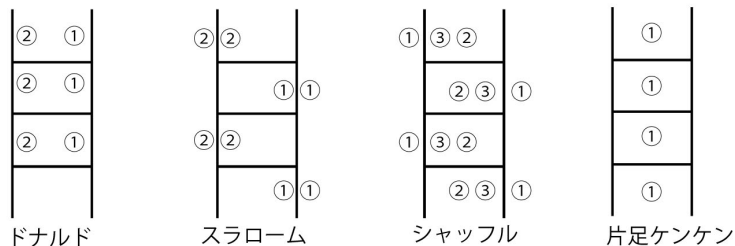
アジリティとは簡単に言うと「すばしっこさ」のことです♪  
むずかしく言うと、身体を巧みに使う巧緻性（こうちせい）、俊敏に体を動かす敏捷性（びんしょうせい）、  
バランス感覚の平衡性（へいこうせい）、目と手や足のなどの協応性をあわせたものですが、これらの能力は  
6歳頃までに、成人のほぼ90%に達するとされています。  
このため年中～小学校低学年は基礎的なアジリティを身につけるのに最適な時期（むずかしい言葉で言うと、  
運動コントロール能力発達の敏感期（sensitive period））とされています！！  
今日は、楽しく遊びながらアジリティ能力を高めるトレーニングを体験します！！

## 今日体験すること

### ①ラダートレーニング

ラダー（はしご）は子どもからプロスポーツ選手まで広く使用されているトレーニング方法です。  
ラダートレーニングは単に敏捷性だけでなく、頭で考えて意識した動き（随意運動）を反射的に行えるように  
することが目的です。むずかしく聞こえるかもしれませんが、小さい頃にケンパをしたことがありませんか？  
最近の子どもはしませんよね（´ー`A）あの遊び、実はアジリティトレーニングに最適だったんです♪

#### 例



### ②フラッグ遊び

アメリカンフットボールをしていますか？ヘルメットや防具をつけてぶつかる激しいスポーツです。  
フラッグフットボールはアメフトの接触をなくし、腰につけたフラッグを取ることをタックルの代わりにしています。  
アジリティ能力の向上はもちろん、戦術を考えたり、老若男女問わずできるスポーツとして注目されています。  
小学校でも2013年度より、新学習指導要領で「フラッグフットボール」が採用されたんですよ（´▽`）  
今日はフラッグフットボールの要素をとり入れた、「しっぽとりゲーム」や「ランゲーム」などを体験します♪

### 今日の体験はいかがでしたか？

アジリティなんてむずかしい言葉にすると構えてしまうかもしれませんが、保護者の皆さんの小さい頃の遊びを  
体系だてているだけなんです。子どもは走り回って遊んでいることが、実はトレーニングだったということですね！  
今後もこのような教室を開いていく予定ですのでご活用ください♪  
今日の感想をアンケートに書いていただければうれしいです♪ 本日はありがとうございましたゞ（´▽`。）

図3. アジリティ教室プリント



表4. 学生スタッフに対する事前指導内容

---

<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本福祉大学の代表であることを理解し、プライドを持って行動しましょう</li> <li>・保護者・運営スタッフ・体験児童を問わず、あいさつ等礼儀をしっかりとる</li> <li>・子どもの理解=君たちの理解ではない。できるだけやさしく、簡潔な表現方法をしよう</li> <li>・参加児童の目線（しゃがんで）話をしよう</li> <li>・見本動作は大きく、表現をオーバーにおこなおう</li> <li>・体験児童がうまくできた時のほめ言葉は、即座に大きな表現でかけよう</li> <li>・スタッフ同士固まらず、参加児童の全面・側面・背面に分かれ安全を見守ろう</li> <li>・「楽しい・不安・悔しい・うれしい」参加児童の表情に注意しよう</li> <li>・一人ばっちの子どもを作らないように気を配ろう</li> <li>・学生スタッフ同士、気がついたことを空き時間等にコメントしあいましょう</li> </ul>
---

---

催の教室に向けて、事前に指導案を作成し、教室前後のミーティングを自主的に行うなど、スタッフ学生の取り組み姿勢の向上が確認された。

#### 4. プレ事業での評価

プレ事業でのアジリティ教室体験後、参加者の保護者30名に対しアンケートを行い、27名（90%）から回答を得た。アンケートの結果、全員が参加してよかったと答えた。良かった理由や感想を自由記述にて回答させた。以下に抜粋する。

Q「参加してよかったですか？」

- ・よかった：27名
- ・どちらともいえない：0名
- ・よくなかった：0名

<良かった理由>

- ・子どもに必要な動きがわかった
- ・子ども達が楽しそうだったから、喜んでいたい
- ・なるべく子どもの運動能力を伸ばしてあげたい
- ・よい動きを楽しくやれた、2回目のせいかな楽しめた
- ・体をしっかり動かせた
- ・できないことが多いけれどそれなりに頑張れることがわかった
- ・楽しみながら運動の基礎がなんとなくわかった
- ・体を動かすことをやらせたかった

Q「参加した感想を教えてください」

- ・体の使い方が分かりよかった
- ・普段しない動きを楽しくやらせてもらいよかった
- ・親も一緒に参加したい
- ・途中で足をくじいてへこんでしまったのでもう少し準備運動をしっかりやってほしい
- ・学生の方が場を盛り上げてくれて楽しく練習できてよかった
- ・お兄さんお姉さんと一緒に行える事も大変子どもに

良いと思う

- ・いつも公園で遊んでいるが、運動量も違うし子どももすごく楽しそうだった
- ・お兄さんお姉さんと一緒にできる
- ・幼児（低学年）までにいろんな運動やスポーツに楽しめる基本的な動きをみにつけさせたい
- ・初めての子どもたちとも一緒にできること 遊びながら体力も養えるような気がした

その他の質問項目について「また参加したいですか？」という問いに対しては参加したい25名に対し、わからない1名、どちらとも言えない1名であった。「参加のきっかけは？」という問いに対しては、興味があった23名、誘われた4名であった。今回の教室の内容であるアジリティトレーニングの内容や学生の指導に対する評価は好意的なものが多かった。また、学生自身も教室内において、参加児童から直接「また来てくれる？」「ありがとう」等の言葉を受けたようであった。保護者からの評価においても若い学生の参加は非常に好感度が高く、今後の教室開催も大学生が参加してくれるのか？ぜひ参加してほしい、という問い合わせを受けた。

指導実績のない学生が指導を行うことを参加者がどのように受け取るかが懸念事項であったが、参加者からの評価は概ね好評であったため、学生の参加を推進した。

#### 考察

2009年の総合型地域スポーツクラブ検討会の発足から約3年、多くの関係者の努力と協力の結果として2012年9月23日にみはまスポーツクラブは設立総会を迎えた。前述のアジリティ教室を含め、各プレ事業のアンケート結果は概ね良好であった。設立後も会員および参加者から高い評価が得られるよう、住民のニーズに合ったプログラムを展開していくことが重要である。しかし、今後みはまスポーツクラブを継続していくためには、解

決すべき課題も多い。主な課題は以下のとおりである。

### 1. みはまスポーツクラブを象徴するプログラムの開発

筆者は、スポーツクラブおよび地域を活性化するためには、会員や地域住民が誇りに思う、象徴的なスポーツ種目の存在が必要と考えている。筆者がクラブ設立に関与した2011年の段階から関係者はじめ、多くの人に「美浜町を象徴するスポーツはなんですか？」という質問を行ってきたが、明確な回答を得ることはできなかった。長い間の実績を伴う必要があるが、例えば、ゴルフがその候補となるのではないかと考える。みはまスポーツクラブでは2010年度のプレ事業以来、地元企業である新南愛知カントリークラブ美浜コースの協力を得てスナッグゴルフ教室を開催してきた。また、みはまスポーツクラブの顧問として岡本綾子プロが就任し、設立総会にあわせて「岡本綾子プロ指導によるスナッグゴルフ体験」のイベントも開催された。本開催のプログラムであるスナッグゴルフ教室では日本プロゴルフ協会所属のプロゴルファーによる指導が計画されている。また、ゴルフに関連したニュースポーツは複数あり、中でも美浜町では高齢者によるグラウンドゴルフの活動が盛んである。子どもから高齢者まで世代別にゴルフに関連したプログラムの設定も可能であることが推察できる。筆者の主観ではあるが、みはまスポーツクラブ＝「大学生のスポーツ教室」＋「ゴルフ」と言った図式ができることを期待している。

### 2. 学生スタッフの育成

長期にわたり継続可能なクラブは極めて少ないと言われている（竹田，2009）。しかし、みはまスポーツクラブの取り組みでは、大学と町（行政）が協働して土台をつくった点に強みがある。今後、両者の協働の中で住民を含む地域との連携が推進されれば、長期継続の可能性が大きく広がるであろう。その中で大学生がクラブに関わることの意義は大きい。学生がクラブに参画していくことで、地域住民は理想的なスポーツ指導環境や人材の提供が得られ、学生は指導体験からコミュニケーション力や運動指導に関するスキルを得ることができる。したがって学生がクラブ（プログラム、運営等）に参画する際には、真剣に取り組む姿勢と、上記のような成果をもたらすマネジメントが不可欠である。そこで、まず大学に必要とされるのは、高い意識や指導力を持つ学生スタッ

フの育成である。本学の学生の多くは学内外のボランティア活動によって、集団・個人双方で社会貢献を行っている者が多い。したがって、地域で活躍できるスタッフへの成長が期待できる。一方、学生には入学・卒業等での入れ替わりという課題や、それぞれの生活環境などの問題も多い。そのため、こうした学生の入替わりに、クラブがいかにうまく対応し、長期的な取り組み（プログラムの継続・展開）を実行できるかが重要となる。クラブの長期継続は質の高い指導と密接に関係しており、質の高い指導は安定的な運営を継続させる条件となる。したがって学生スタッフの育成は、みはまスポーツクラブにおける重要な課題と言える。現在、スポーツクラブでの学生の学びのために、事前指導と事後の振り返り学習を行っている。今後、事前指導の理解度を高めるために映像を使った教材を作成し、利用することを計画している。また、参加者のアンケートを活かし、振り返り学習の充実を図りたい。

スポーツクラブでの取り組みは、本学の子ども発達学部をはじめ、各学部の教職課程で学ぶ学生の指導実践の場となることが期待できる。その点では、学生個人が将来に活かせる指導技能や考え方を学ぶことができるよう、对学生の指導体制を、教員を中心として充実させることも今後の課題となるであろう。

### 3. 運営の移行

大学と町の協働事業で始まったみはまスポーツクラブであるが、住民主導による運営に移行することが最終課題である。住民主導運営が達成された場合、大学および行政は協力機関としてサポートを行うこととなる。谷口と内倉（2011）は、現在の総合型地域スポーツクラブ育成事業は、「これまでわが国で主流であった「行政（主導）住民（追従）型」という従来の地域スポーツを取り巻く「しくみ」から脱却し、住民主導によるスポーツ環境づくりをはじめとした、新しい「行政 - 住民」関係を構築しようとする社会的営みを創出する契機となりえたものと理解できる」、と述べている。しかし、同時に従来までの行政主導から住民主導への方向転換には至っておらず、「住民主導による地域スポーツプロモーション論に対する模索状態」であり、住民主導への移行の難しさにも言及している（谷口と内倉，2011）。実際にみはまスポーツクラブにおいても、現在運営に参加している一般住民はいない。住民主導への移行が成功した東亜



スポーツクラブでは、クラブ運営を定年退職した地域住民がボランティアに近いかたちで行っている。今後は、またスポーツクラブが住民主導による運営を行うためには「人材の発掘」も大きな課題であると推察される。

## まとめ

本稿では2009年から2012年にかけて日本福祉大学と美浜町が協働で行ってきたみはまスポーツクラブの事例を報告した。設立までの経緯・理念・取り組みなどの背景に加え、大学生が参加するプログラム策定に重点を置いて報告した。特にブレ事業での体験教室を経て本開催につなげた「ちびっこアジリティ教室」と「小学生レクリエーションサークル」を取り上げて考察した。これらのブレ事業における大学生の指導実践や参加した子どもの親からの評価などの記録をもとに、大学生を指導スタッフとして育成する際のプロセス、ならびに大学生が指導に携わるメリットについて述べた。設立間もないみはまスポーツクラブは、今後の育成や運営に関してまだ多くの課題を抱えているが、大学生を指導者として継続的に育成していくことは、本クラブの安定的な運営に関わる重要な要素と考える。

現在、大学と地域（行政組織、あるいは地域住民）が協働で運営している総合型地域スポーツクラブは、筆者が知りうる限りでも25例あり、（2012年9月時点）各クラブ独自の運営を行っている（文部科学省、2012B）。今後の運営から得られる知見を蓄積し、さらに諸クラブと積極的に情報交換をすることで、新しいプログラムの開発やみはまスポーツクラブの安定的な運営や発展に寄与したい。

## 引用文献：

- 愛知県スポーツ振興審議会（2011）：平成23年度愛知県スポーツ振興審議会会議資料
- 蒲真理子・佐野新一・宮口和義・鶴沢典子（2003）：幼児期におけるアジリティラダを使用した遊びの検討 北陸大学紀要第27号，pp 13-23
- 公益社団法人 スポーツ健康産業団体連合会（2008）：スポーツ産業による子どものスポーツ人口拡大に関する調査報告 社団法人 スポーツ健康産業団体連合会報告書，pp 28
- 財団法人 日本体育協会（2008）：総合型クラブ創設ガイド 財団法人 日本体育協会
- 杉原 隆編著（2001）：幼児の体育 健帛社，pp 28-29
- 高橋仁美・来田宣幸・坂井智明・竹田正樹（2010）：京たなべ・同志社スポーツクラブにおけるサークル活動展開の意義と立ち上げおよび運営上の課題 同志社大学スポーツ健康科

学（2），pp 78-89

- 高橋仁美・来田宣幸・坂井智明・竹田正樹（2010）：地域と大学が連携した総合型地域スポーツクラブとしてのチアリーディング教室の取り組み 同志社大学スポーツ健康科学創刊号（1），pp 79-91
- 竹田正樹（2009）：「京たなべ・同志社スポーツクラブ」を例とした大学と地域連携による総合型地域スポーツクラブの提案 同志社大学スポーツ健康科学創刊号（1），pp 61-70
- 谷口勇一・内倉康二（2011）：住民主導を意図した総合型地域スポーツクラブ育成事業における「揺らぎ」の意味と構造 大分大学教育福祉科学部研究紀要，pp 201-213
- 中野昭一（2001）：図説・運動・スポーツの功と罪 運動生理・スポーツ医学・栄養 医歯薬出版株式会社，pp 20-21
- 日本福祉大学スポーツ教育センター・美浜町教育委員会社会教育課社会体育係（2010）：平成21年度美浜町民及び児童・生徒の運動・スポーツに関する実態調査 日本福祉大学スポーツ教育センター・美浜町教育委員会社会教育課社会体育係。
- 日本福祉大学スポーツ教育センター HP：  
<http://www.n-fu.kushi.ac.jp/sports/index.html>  
（2012.9.25 取得）
- 日本福祉大学 HP：<http://www.n-fukushi.ac.jp/about/gakuen/jigyoku/file/gaiyou/12/03.pdf>（2012.9.25 取得）
- 久湊尚子・尾崎秀男（1996）：体育の多種目的カリキュラムにおける有効性 高岡短期大学紀要（7），pp 49-58
- 文部科学省（2006）：スポーツ振興基本計画  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/plan/06031014.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/plan/06031014.htm)（2012.9.25 取得）
- 文部科学省（2011）：スポーツ基本法リーフレット  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/sports/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2011/08/24/1310250\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/08/24/1310250_01.pdf)  
（2012.9.2 取得） 文部科学省スポーツ・青少年局スポーツ・青少年企画課 3章，11節，pp 6
- 文部科学省（2012A）：スポーツ基本計画リーフレット  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/sports/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2012/08/08/1319359\\_5\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_icsFiles/afieldfile/2012/08/08/1319359_5_1_1.pdf)  
（2012.9.25 取得） 文部科学省スポーツ・青少年局スポーツ・青少年企画課 3章，3節，pp 5
- 文部科学省（2012B）：平成24年度総合型地域スポーツクラブ育成状況 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/club/1325025.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/club/1325025.htm)（2012.9.25 取得）
- 文部科学省 幼児期運動指針策定委員会（2012）：幼児期運動指針ガイドブック 文部科学省幼児期運動指針策定委員会 1章，3節，pp 13-16